

他の系列		立野・細久保系列			
大川・神宮寺	沢・樋沢	型式名	標式遺跡（段階）	特徴的な押型文	押型文の施文部位
大鼻					
大川					
神宮寺					
		立野	美女	ネガ楕円押型文	上半部：縦位密接、下半部：横位密接
			鳥林	格子目押型文	
	沢・樋沢	細久保	岩清水・山の神1群	楕円押型文	口縁部：横位密接、頸部：沈線・刺突文、 胴部～底部：横位密接
			山の神2群		
			塞ノ神・山の神3群	異種併用押型文	口縁～底部：横位密接

表14 押型文土器編年表

引用参考文献

飯田市教育委員会1998『美女遺跡』

小谷村教育委員会1999『林頭遺跡』

岡谷市教育委員会2000『樋沢遺跡』

川崎 保2002「山の神遺跡ほか」『長野県埋蔵文化財センター年報』18

川崎 保2003「神村論文を読んで押型文土器編年を考えるー細久保式の成立と展開からー」『利根川』24・25（投稿中）

笹沢 浩・小林 孚1966「上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器」『信濃』18-4

信濃町教育委員会2001『市道遺跡発掘調査報告書』

徳永哲秀2000「尖底土器を作る」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8

長野県考古学会縄文時代（早期）部会編1995『シンポジウム特集号表裏縄文から立野式へ 長野県考古学会誌』77・78

長野県考古学会縄文時代（早期）部会編1997『シンポジウム「押型文と沈線文」資料集』

長野県埋蔵文化財センター 1994『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13鳥林遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 2002『馬捨場遺跡』

福島邦男1994「縄文時代」『望月町誌第三巻原始・古代・中世』望月町

第2節 山の神遺跡の異形部分磨製石器について

1 はじめに

山の神遺跡では異形部分磨製石器が41点出土している。国内最多というだけでなく、いずれも縄文時代早期中葉の遺物包含層から出土していて年代が限定でき、また出土状況が明らかであることから、今まで、用途・機能が不明であった異形部分磨製石器の性格解明の端緒としたい。

2 異形部分磨製石器とは

異形部分磨製石器の研究史は、岡本東三の論文に詳しい（岡本1982）。詳しい研究史は岡本論文を参照されたいが、岡本論文にもとづいて概略に触れたい。事実報告の最初は八木熒三郎が宮崎県西諸県郡須木村例をとりあげた（八木1893）。その後島田貞彦が滋賀県蒲生郡比都佐村出土例を紹介した（島田1928）。

戦後は鎌木義昌の岡山県黄島貝塚の調査（鎌木1949）、京都大学の平戸学術調査による長崎県志々伎村岡出土例の報告（京都大学1951）、江坂輝弥の茨城県刈又坂遺跡出土例の報告（江坂1955）がある。

その後東海地方の類例を紹介した紅村弘は「異形局部磨製石器」と命名した（紅村1963）。また安達厚三が、特徴をまとめた。安達は「異形部分磨製石器」と呼称する（安達ほか1965・安達1966）。研究史的には

紅村の命名の方が古いわけで、本来は異形局部磨製石器と呼称すべきかとも思われるが、山の神遺跡報告書では発掘調査段階で異形部分磨製石器として取り上げられてきた経過があり、便宜的に「異形部分磨製石器」としておく。ただ、紅村弘と安達厚三の示している内容は同じものであろう。また橋本正（1968）、津田守一（1976）副島邦弘（1977）らの報告がある。

また岐阜県内の類例を集成した吉田英敏は粘板岩などの砥石による「研ぎ」と打ち粉による「磨き」の工程を実験から推定し、さらに安達厚三同様「利器」ではなく「非実用的」あるいは「マジカルな」石器で狩猟動物と関係する石器だと推定する（吉田1976・1979）。

これに対し、岡本東三は全国の類例を集成した上で、1 磨痕の場所・状態が一定しない。2 まったく磨痕の認められないものがある。3 他の磨製石器に見られる磨製痕とはことなる。ローリングを受けたような「トロトロ」したような磨痕であることを根拠に、意図的な研磨ではなく、使用痕（磨耗）によるものとした。また一つの可能性として押型文原体を加工する道具ではないかと推定する。

岡本論文（1982）以降では、高山考古学研究会の集成（1984）、和田英寿（1989）、木崎康弘（1997）、木野本和之・新田智子（1997）の論文や報告がある。

和田は製品として搬入されていること、石材を限定していることから利器ではないとし、一括遺物中に破損品を含むことから回収を前提とした埋納ではなく、交易に伴う遺物ではないとする。さらに基部の抉りを入れたいわゆる当該期に盛行する「鋏形鏃」に類似する点から、狩猟活動に關与する儀礼に伴うものと推測した。

木崎は熊本県牟田原遺跡や瀬田裏遺跡で異形部分磨製石器と共伴した「男性器形石製品」に形態的な共通点があるとし、異形部分磨製石器は男性器を祭る儀礼に伴う石器だと推測する。さらに男性にかかわる祭祀としては、山の神信仰にかかわる狩猟祭祀を想定する。

長野県内では、川上元（1967）や菅平研究会（1970）が類例を紹介したほか、和根崎剛（2001）が最近資料報告を行った。

3 山の神遺跡の異形部分磨製石器

すでに第6章第1節で説明したように、山の神遺跡では41点の異形部分磨製石器が出土している。出土状況はグリッド I-V-23 の遺物集中 SQ01 から14点、およびその周辺でグリッド I-V-23 出土として取り上げたものが13点、よってグリッド I-V-23 からはのべ27点が出土している。

また、グリッド I-V-18 の SK02 から2点、およびその周辺でグリッド I-V-18 出土として取り上げられたものが3点、よってグリッド I-V-18 からはのべ5点が出土する。

いずれも山の神検出段階①ないし②で発掘されており、Ⅱb層からⅢa層の遺物である。よって所属時期は縄文時代早期中葉山の神遺跡3期（異種併用押型文を特徴とする塞ノ神・山の神3群土器段階）である。

異形部分磨製石器19・39・40はⅣa層出土なので、縄文時代早期中葉山の神2期にさかのぼる可能性が高いが、これ以外は山の神3期の可能性が高い。

石材は今までの類例同様、チャート製が大半で、異形部分磨製石器29・30だけは玉髓（石英）製である。しかし、石鏃に多用されている頁岩製のものは1点もない。

また同じチャート製ではあるが、石鏃、搔器、削器に用いられるチャートとはかなり異なるチャートが異形部分磨製石器には用いられている。全体に青味がかかった灰色を呈し、また黒色の脈が入るものが多い。

法量は長さ9.2～1.8cm、幅4.45～1.25cm、厚さ1.3～0.25cm、重さ49.2～0.51gとさまざまである。

山の神遺跡の異形部分磨製石器の出土状況や特徴をまとめると、1 遺跡全体からまんべんなく出土している石鏃、搔器、削器とは出土状況が異なり、比較的集中して出土した。2 特定の石材に集中する。とく

に利器と考えられる石鏃、搔器などに多用される頁岩製の異形部分磨製石器が1点もなく、先学が指摘したようにチャート製のものが大半を占める。3 法量は非常にばらついている。大きさより形態が重視されていた。4 未製品、石核、原石がない。遺跡周辺にもこの手のチャートの存在が知られていない。製品として山の神遺跡に持ち込まれた可能性が高いといえよう。

以下の点から利器の可能性は極めて低いと思われる。1 山の神遺跡の利器に多く使用されている頁岩製の異形部分磨製石器がない。2 チャートでなければいけない用途だったとしても、石鏃や搔器などに用いられているチャートとはまったく様相がことなる。石鏃や搔器に用いられているチャートは色調が緑色や赤色などさまざまに黒い脈が入るものはない。逆に異形部分磨製石器は青味がかかった灰色が主体で黒色の脈がはいっている特徴がある。つまり石材の質感や色調が重要なのであって、物理的な硬さや特徴が共通していても利器に用いられたチャートは異形部分磨製石器には用いられていない。

4 他の遺跡との比較

岡本は、安易な用途の推定は好ましくなく、遺跡の出土状況もよく検討すべきであると指摘する（岡本1982）。至言である。よって、出土状況が判明している他の遺跡と比較してみる。

まず、岐阜県高山市前平山稜遺跡では、東西南北を向くように大小4点の異形部分磨製石器が出土しているとされる。吉朝則富は異形部分磨製石器が着柄されて東西南北におかれたものと推定する（吉朝1993）。

熊本県大津町瀬田裏遺跡では20点の異形部分磨製石器の出土があったという（木崎1997）。うち発掘調査で出土し、出土状況が判明しているのが18点である（瀬田裏遺跡調査団1992）が、集石遺構から1点出土しているが、のこりはすべてグリッド、遺物包含層からの出土で、とくに集中したり、なんらかの土坑に伴っているわけではない。

三重県宮川村神滝遺跡例などをもって土肥孝は、「デポ」の可能性を指摘したようだが（土肥1987）、神滝遺跡例は発掘調査によるものでなく、出土状況を検討した木野本らによると畑の耕作によって徐々に発見され、結果として16点に及んだものらしい（木野本・新田1997）。

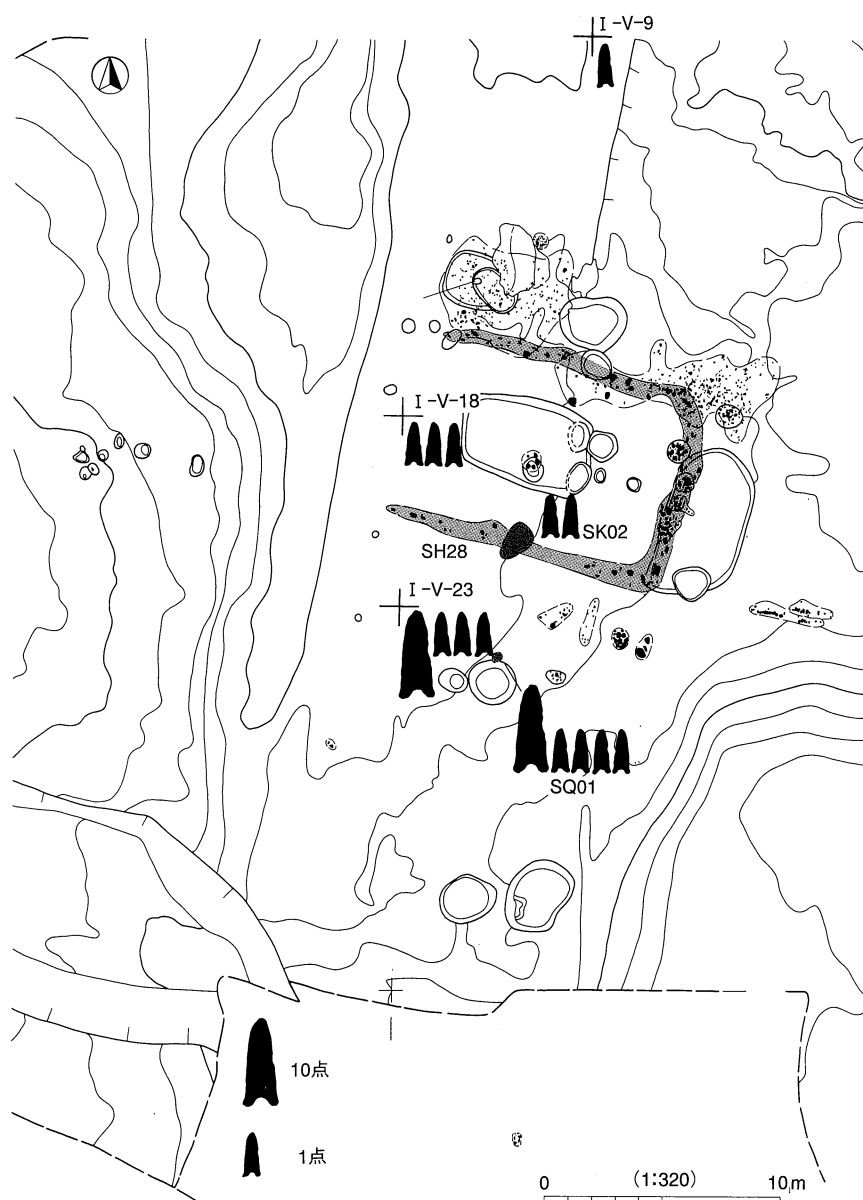
管見では10点をこえるような出土例は瀬田裏遺跡と神滝遺跡しか今のところ知られていない。よって、現段階では、なんらかの意図をもって一括埋納したような状況は発掘調査の所見からは得られていないといえよう。

山の神遺跡例も集中して出土してはいるが、土坑SK02には2点だけ伴っていただけであり、一括埋納というよりは、結果的に集中していたというような状況であり、遺物集中SQ01にも掘り込みは検出されていない。

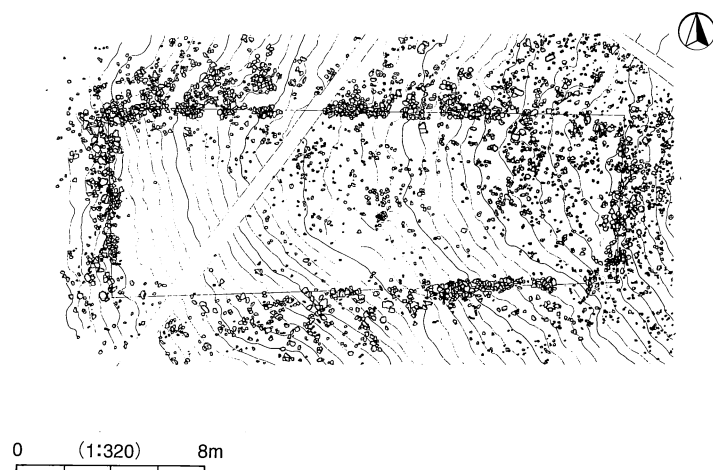
遺跡の中での位置付けを考えてみると、山の神遺跡の異形部分磨製石器の大半が検出された山の神遺跡Ⅱ～Ⅲ層（縄文時代早期中葉3期）は、確実な住居跡は1軒だけで、「コ」字状に区画される石列SH28や花卉形をしたSH01aなどの屋外集石炉が作られたと考えられている。煮炊き用と考えられる屋外集石炉はともかく、直線的な配列をしめすSH28などの石列の性格は不明である。ただ、遺跡全体の中で見れば、このSH28の南側に集中して異形部分磨製石器が出土していることになる。また、散在している異形部分磨製石器も石列をとりまくように出ているようにもとらえることができる（第199図）。

ここで注目されるのが、瀬田裏遺跡例である。瀬田裏遺跡でも長さ21m×幅7mの長方形配石遺構が検出された（第200図）。調査報告（瀬田裏遺跡調査団1993）によれば、「安山岩板石状の集石（個々の単位－ユニットをもつ）の集合体により構成される。個々のユニットの石材配石方法は1石材の小口部を揃えて積む2石材を交互に積み重ねるの二種類がある。」という。

山の神遺跡より規模がやや大きいのがやはり早期中葉の押型文土器の遺構であり、石材の配置方法や石列



第199図 山の神遺跡石列SH28及び異形部分磨製石器出土分布



第200図 瀬田裏遺跡長方形配石遺構

の配置方向はほぼ東西南北を向いている点などが共通する。

現段階では縄文時代の長方形に区画する石列の類例自体がなく、他に比較検討のしようがないが、異形部分磨製石器の大量出土と石列になんらかの関係があるかもしれない。

5 まとめにかえて

以上非常に雑駁ではあるが、異形部分磨製石器については1利器の可能性は低い。2ほとんどの遺跡では数点しか出土しないが、稀に10点以上集中して出土する遺跡がある。3「デポ」などのなんらかの意図をもった一括埋納の可能性は現段階の出土状況からはいえないといった点が指摘できる。

また、山の神遺跡について大量に異形部分磨製石器を出土した瀬田裏遺跡に21m×7mの長方形の東西南北に向いた「配石遺構」が検出されている点は、注目に値しよう。

さて、仮にこうした石列・配石遺構が異形部分磨製石器の性格とかかわりがあったとしてどのような用途が推定できるだろうか。縷説することになるが、今のところ一括埋納を示すような出土状況は知られていない。

多くが、遺構検出面あるいは遺物包含層中から出土している。出土状況が比較的是っきりしている山の神遺跡や前平山稜遺跡の例をみれば、大きいものから小さいものまでがまとまって出土する点が共通する点である。

本稿では、発掘調査で判明した所見を中心に論じた。今後は異形部分磨製石器自体の磨耗痕の分析や他の遺跡での出土状況や類例の検討を行い、より研究をすすめていくことが期待される。

本稿を執筆するに当たってとくに以下の諸氏に多大なる尽力を得た。記して謝意を表する。

神村 透、木崎康弘、木野本和之、桜井秀雄、田中 彰、穂積裕昌、町田勝則、山田 猛、吉田英敏

引用参考文献

安達厚三・大参義一・井口喜春1965「織田井戸遺跡発掘調査報告（付）総濠遺跡発見の異形部分磨製石器」『いちのみや考古』6号

（大参義一・井口喜春との連名だが、異形部分磨製石器部分は安達の執筆）

安達厚三1966「異形部分磨製石器について―美濃、尾張地方発見例を中心として―」『いちのみや考古』9号

江坂輝弥1955「茨城県多賀郡刈又坂遺跡」『日本考古学年報』3（※）

岡本東三1982「トロトロ石器考」『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集1―』

片岡 肇1968「いわゆる異形部分磨製石器の新資料」『古代文化』20-3

鎌木義昌1949「備前黄島貝塚の研究」『吉備考古』77（1996『瀬戸内考古学研究』に再録）

川上 元1967「異形部分磨製石器の新資料」『信濃』19巻4号

木崎康弘1997「男性器形石製品とトロトロ石器とのただならぬ関係について―トロトロ石器の性格を考える―」

『人間・遺跡・遺物3麻生優先生退官記念論文集』

木野本和之・新田智子1997「宮川村神滝遺跡出土の異形局部磨製石器について」『研究紀要』6号、三重県埋蔵文化財センター

京都大学平戸学術調査団1951「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』（※）

紅村 弘1963『東海の先史遺跡総括編』（※）

島田貞彦1928『有史以前の近江』（滋賀県史蹟調査報告第1冊）（※）

菅平研究会1970『菅平の古代文化』

瀬田裏遺跡調査団1992『瀬田裏遺跡調査報告資料Ⅱ』熊本県大津町教育委員会

瀬田裏遺跡調査団1993『瀬田裏遺跡調査報告Ⅱ』熊本県大津町教育委員会

副島邦弘1977「大道端遺跡の石器について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告（XⅣ）』福岡県教育委員会

高山考古学研究会1984「飛驒の考古学遺物集成（3）－異形部分磨製石器特集－」『岐阜県考古』9号

津田守一1976「神滝遺跡出土の異形局部磨製石器について」『歩跡』3号

土肥 孝1987「縄文時代の文化交流－近畿各地域の土器・石器の検討－」

『大阪湾をめぐる文化の流れ－もの・ひと・みち－』帝塚山考古学研究所（※）

橋本 正1968「回転押型文土器の問題－富山県の場合－」『大境』4号（※）

八木熒三郎1893「本邦発見石鏃形状の分類」『東京人類学雑誌』9巻93号（※）

吉朝則富1993「石器」『前平山稜遺跡赤保木遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会

吉田英敏1976「中濃地方における異形部分磨製石器－津保川流域の分布－」『岐阜県考古』5号

吉田英敏1979「中濃地方における異形部分磨製石器PARTⅡ－長良川中流域の分布を中心に－」『岐阜県考古』7号

和田英寿1989「押型文土器文化期における特殊石器の一様相」『龍谷史壇』93・94号

和根崎剛2001「真田町傍陽・入軽井沢出土の『トロトロ石器』」『長野県考古学会誌』93・94号

（※）原論文筆者未見。（岡本1982）（和田1989）による。